

養源院

概要と歴史

養源院は仏教寺院である。1594年に開創され、戦いに倒れた侍の記念碑としても、また江戸時代（1603～1867年）の初期を代表する芸術の宝庫としても、ユニークな歴史遺産としての性質をもっている。

養源院は16世紀末の日本の歴史において大きな役割を演じた人物たちと関わりがある。その当時は、武将たちが覇権を争っていた時代である。全国統一を成し遂げた武将の豊臣秀吉の側室である淀殿（1567～1615年）が、自らの父親である武将の浅井長政（1545～1573年）を供養するために養源院を創設した。「養源院」とは、浅井の戒名である。

1619年にこの寺は火事で焼失したが、淀殿の妹であるお江（1573～1626年）が1621年に再建した。お江は第2代の徳川将軍、徳川秀忠（1579～1632年）と結婚し、徳川の忠臣たちを供養することにした。死んだ侍たちの血がしみついた城の床板を、ここに祀ったのである。

養源院は美しい美術作品で有名である。琳派の創設者の一人である俵屋宗達（1570年頃～1640年）による板絵などもそれに含まれる。この板絵には、象や神秘的な獣たちが描かれている。寺の本堂には狩野山楽（1559～1635年）の作品がある。これには、金箔の背景にダイナミックなポーズの獅子が鮮やかな色彩で描かれている。

この寺の本堂、護摩堂、中門、鐘堂は重要文化財である。寺の敷地は、桜や楓の木など、季節を彩る美しい自然が豊かな、小さなオアシスとなっている。